

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 17 日現在

機関番号：34517

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2012～2015

課題番号：24330229

研究課題名(和文) 教師の専門性の再検討と教師教育における「子ども理解のカリキュラム」の構想

研究課題名(英文) Reconsideration of teacher's specialty, and design of "curriculum for understanding children" in teacher education

研究代表者

田中 孝彦 (TANAKA, TAKAHIKO)

武庫川女子大学・教育研究所・教授

研究者番号：80092261

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 13,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、複数の地域で教師と教師教育者からの継続的な聴きとりを重ねた。その結果の概略は次のとおりである。多くの教師が、子どもの生存・発達・学習への要求に応える援助的・教育的実践を、父母・住民・援助職と共に模索している。教師教育の現場では、学び手が福祉・医療・心理臨床などの諸分野で蓄えられてきた子ども理解の経験・洞察を摂取できるように、子ども理解のカリキュラムの開拓の試みが始まっている。教師教育者の間では、自らの人間的・専門的な成長のための自己教育についての関心が徐々に熟してきている。そして、これらの聴きとりをもとに、子ども理解のカリキュラムの構築にかかわる諸課題の理論的検討を試みた。

研究成果の概要(英文)：In this study, we have interviewed continuously with children, teachers and teacher educators at some areas. Summary of results is as follows. Many teachers are narrating that it is important for them how to understand each student, how to create educational practices responding to their needs to life, development and learning and how to build cooperative relations with students, parents, neighbors and helping professionals. In the fields of teacher education, noteworthy attempts are starting to construct "curriculum for understanding children" with experiences and insights stored in the words of welfare, health care, clinical psychology and education. Among teacher educators, real concerns to self-education for their human and professional development are arising gradually. And on these interviews, we have investigated important problems theoretically about construction of "curriculum for understanding children" in teacher education.

研究分野：教育学

キーワード：子ども理解 発達援助職 教師の専門性 教師教育のカリキュラム 臨床教育学

1. 研究開始当初の背景

(1)問題意識

本研究課題は、次に挙げる問題意識のもとに構想された。

貧困や格差を拡大する日本社会の激しい変動が、子どもの育ちをめぐるあらたな問題を生み出している。また、東日本大震災という未曾有の災害が、その爪跡を生々しく残しているなかで、教育現場のもつ普遍的な意味が見直され、教師・援助職の専門性が、これまで以上に問われている。上記の社会状況を背景としながら、現代の教師には、学問・文化の基本を教授するだけでなく、一人ひとりの子どもの生活と生育史を理解し、彼らの生存・発達・学習を支える援助的・教育的実践を全体的に構想し、保護者・住民や他領域の実践者と協力して働く力量と専門性が求められるようになってきている。そして、教師教育(養成・研修を含む)には、子どもの生存・発達とその条件に関して、福祉・医療・心理臨床・教育などの諸分野で蓄積されてきた実践と研究の到達を、本格的に学習・研究し摂取できるカリキュラムを構想し実現することが求められている。

これらの問題意識が本研究の基軸であったが、その一方で、次に挙げるような学術的背景が研究の方向性を定めていった。

(2)学術的背景と経緯

本研究は、日本教育学会課題研究「臨床教育学の動向と課題」(1998年9月~2001年8月)及び同特別課題研究「教師教育の再編と教育学の課題」(2002年9月~05年8月)

科研費基盤研究(B)「臨床教育学の展開と教師教育の改革」(2003年4月~06年3月)及び同基盤研究(A)「臨床教育学の構築と教師の専門性の再検討」(2009年4月~12年3月)の共同研究、などを踏まえたものである。

それらの成果は、については、小林剛・皇紀夫・田中孝彦編著『臨床教育学序説』(2002年、柏書房)と、日本教育学会特別課題研究・研究集録『教師教育の再編と教育学の課題 1 2』(2003年8月、2006年8月)に、については、科研費研究成果報告書『臨床教育学の展開と教師教育の改革に関する研究』(2006年3月)及び田中孝彦・森博俊・庄井良信編著『創造現場の臨床教育学』(2008年、明石書店)と、『臨床教育学と教師の専門性』(科研費共同研究資料集、2010年3月、2011年3月)にまとめられている。

これらを通じて行ってきたのは、以下のような研究活動であった。

【地域調査】

北海道松山郡上ノ国町、山梨県都留市、岐阜県恵那市・中津川市において、子どもの育ちと教師の子ども理解にかかわって発生している新しい問題状況、そのなかではじまっている子ども理解と教師の専門性の問い直しの模索などを、子ども・若者、住民、

教師、福祉・医療・心理臨床の専門職、行政担当者などの語りを聴きとり記録し吟味することによって確かめてきた。

【大学調査】

武庫川女子大学大学院臨床教育学研究科、福井大学教職大学院、都留文科大学大学院臨床教育実践学専攻及び学部初等教育学臨床教育学コース、北海道教育大学大学院学校臨床心理学専攻及び教職大学院、北海道大学において行われている臨床教育学の研究・教育の試みを調査してきた。

それらを通じて、日本の臨床教育学が、科目・講座・専攻の設置などの制度レベルの動きに留まらず、具体的な内容を生み出しつつあり、子ども理解と教師・発達援助専門職の専門性の問い直しに関わる教育学の自己革新の試みとして展開されており、大学院を含んだ教師教育のカリキュラム作りと密接な関連を持って進められていることを確かめてきた。

【海外調査】

フィンランドのオウル大学カヤーニ校(教師教育学科)のP・ハッカライネン教授らによるNarrative Learningの研究と教師教育改革の試み、カナダ・トロントのヨーク大学のD・ペプラー教授らによる子ども・若者たちの「いじめ」問題への対応・予防を図る病院・福祉施設・学校などの連携的な実践・研究と教師教育改革の試み、それと関連したトロント大学教育学部附属学校の「子ども理解」を軸とした教師教育改革の試み、などを対象とした調査を重ねてきた。

これらによって、私たちの問題関心と共通する子ども理解を軸とした臨床教育学の開拓と、教師の専門性の問い直し、教師教育の改革の動きが世界の中でも生まれていることを確かめることができ、それを担う実践家・研究者たちと交流し関係を結ぶことができた。また、いずれの試みにおいても、地域において子どもを支える住民・専門家・教師の共同関係の創出が追求されていたことも印象深かった

【理論的研究】

以上の調査研究と並行して、子ども理解を軸とした、子どもの生存・発達・学習を支える臨床教育学の構想・概念・方法に関する理論的検討を重ねてきた。それを通じて、「子ども理解のカンファレンス」、「子どもを支える地域の新しい共同関係」、「福祉・医療・心理臨床などの諸領域で働く発達援助専門職」、「発達援助専門職の一員としての教師」、「子ども・親・発達援助専門職の生活史・実践史の語り」と聴きとり、「ケアと教育の結合」、「子ども理解と学習指導の改革の結合」、「子どもの自己感覚・自己意識の発達を支える援助・教育の全体構想」などの言葉・概念と方法意識を徐々に共有してきた。

そして、今日の教師にとっての子ども理解の重要さと困難さを検討し、教師の専門性を問い直し、教師教育における「子ども理解の

カリキュラム」(大学院を含む)を構想することに焦点化した、今回の調査研究と理論研究の必要性を意識するにいたった。

2. 研究の目的

上記の背景と経緯を踏まえ、本研究では、「教師の専門性の再検討と教師教育における子ども理解の『カリキュラム』の構想」を研究テーマとして掲げ、それを達成するための調査・研究活動と具体的目標を次のように設定した。

【大学調査】

(1)武庫川女子大学大学院臨床教育学研究科、(2)都留文科大学臨床教育実践学専攻及び学部臨床教育学コース、(3)福井大学教職大学院、(4)北海道教育大学大学院学校臨床心理学専攻及び教職大学院、(5)北海道大学において取り組まれている、子ども理解を軸とする臨床教育学の構築、教師の専門性の再検討、教師教育の改革の試みの経緯・到達・課題を整理する。

【地域調査】

(1)兵庫県西宮市及びその近隣地域、(2)北海道檜山郡上ノ国町及びその近隣地域、(3)岐阜県恵那市・中津川市において、問題・困難を抱えた子どもについての理解の深化と、子どもを支える新しい共同関係の創造を追求し、発達援助専門職や教師のあり方を模索している人々の動きについて調査研究を行い、子ども理解と教師の専門性の問い直しの今日的課題を確かめる。

【理論研究】

(1)臨床教育学の開拓の試みに触れて学習・研究してきた現職教師、学生・院生たちは、すでに相当数にのぼっている。本研究では、とくに彼らの間で起きている教師の専門性の問い直しの動きを聴きとり記録し吟味することを重視する。

(2)教師を、現代の発達援助専門職の一員、子どもの生活史・生育史上の問題・課題の共感的な理解者、子どもが発達・成長のために必要とする人間関係のコーディネイター、子どもが必要とする学習活動の計画的組織者、Teacher(教授者)であるだけでなく Educator(教育者)として位置づけ、その専門性を問い直す。

(3)教師教育における「子ども理解のカリキュラム」については、基礎的な講義を通しての学習、子どもと交わる実習的学習、一人ひとりの子どもの生活史・生育史に関する事例的な学習、教師の生活史・実践史に関する追体験的な学習、福祉・医療・心理臨床などの諸分野の発達援助専門職の経験・洞察の蓄積を摂取する学習、子ども理解に関わる現代の研究の動向と概念を把握する文献講読的学習、卒業論文・修士論文などの作品制作を通しての学習、などの重層的な構想を描きたい。

(4)教師教育においては、それに携わる

Teacher Educator(教師教育の教師)の質とそのチーム編成のあり方を問わねばならない。これは、日本ではまだ本格的に検討されていないが、「Teacher Educator 研究」の一步を踏み出したい。

3. 研究の方法

本研究の全体を通じて採用した研究方法は、次のようなものであった。

(1)教育の当事者は子どもであり、子どもと共に生きている保護者・おとなであり、彼らを支えている発達援助専門職(教師を含む)である。これらの人々の声を聴き、その生活史・生育史・実践史の語りを記録し、それを吟味することを研究の基本とする(Narrative Based)。

(2)子どもたちが困難に直面するのも、支えてくれる他者に会うのも、彼らが暮らす具体的な地域においてである。相談室で子どもに接するだけでなく、地域を訪問して子どもたちとできるだけ自然に接近することを重視する(Community Based)。

(3)子どもの生存・成長の質は、結局は、その子が世界の中で形成してきた自己感覚の質によって左右される。子どもの自己感覚の発達に関心を向け、個々の関係・能力の獲得も常にそれとの関係において研究することを重視する(Self Focused)。

近年、世界の間人発達とその援助に関する研究は、「量的研究」にとどまらず「質的研究」を深めていくことを課題とするようになってきているが、こうした私たちの方法意識は、世界の間人発達とその援助・教育に関する「質的研究」の試みにおいて共通に重視されてきているものである。本研究は、日本の子どもの現実から出発し、子ども理解を深め、教師の専門性を問い直し、教師教育カリキュラムを構想し、そのために必要で国際的にも流通可能な概念・方法を練り上げようとするものであり、日本の教育学の新しい展開と、世界の間人発達とその援助・教育に関する「質的研究」の発展に寄与する、一つの仕事になりうるのではないかと考えている。

4. 研究成果

以上に述べた本研究の目的を達成するために、具体的には以下に記す調査・研究活動と理論研究を行い、研究分担者間で共有すべき資料やそれらをまとめた研究資料集及び聴きとり記録集を各年度(平成24年~27年度)編み、最終年度には「研究成果報告集」をまとめることができた。

また、それらの成果を国内の教育関連諸学会(日本教育学会・日本臨床教育学会・日本教師教育学会・武庫川臨床教育学会等)で発表した。

【大学調査】

国内において、子ども理解に主軸を置きな

がら教師としての専門性を探究している福井大学(学部)及び福井大学教職大学院の訪問調査を実施することができた。また、共同研究者の多くが所属する武庫川女子大学大学院臨床教育学研究科の歴史的経緯とそこでの実践の展開に関する調査にも着手することができた。

また、後で触れる科研費公開研究会を通じて、都留文科大学臨床教育実践学専攻及び学部臨床教育学コース、北海道教育大学大学院学校臨床心理学専攻及び教職大学院において取り組まれている、子ども理解を軸とした教育カリキュラムの構築の動きや、教師の専門性の再検討、教師教育の改革の試みに関する経緯・到達・課題について、当該機関で勤務する研究者とともに検討を重ねることができた。

これらの研究過程については、『研究資料集』(～)にまとめてある。

【地域調査】

地域調査では、地域に生きる教師や援助者、教育行政担当者と連携しながら、子ども・教師への聴きとり調査を実施することができた。訪問した地域は、北海道檜山郡上ノ国町及びその近隣地域、兵庫県西宮市及びその近隣地域、滋賀県蒲生郡及び近江八幡市であった。とりわけ、北海道檜山郡上ノ国町においては、年1回から2回の訪問調査・聴きとり調査を重ねることができ、継時的な地域調査のもとで地域の教師が抱える実践の課題や、地域における子ども像の彫琢が可能となった。

その成果は、研究分担者が中心となって開催した研究会(全体研究会、科研費公開研究会)で吟味され、『聴きとり記録集』や研究成果報告集『教師の専門性の再検討と教師教育における「子ども理解のカリキュラム」の構想』にまとめるとともに、現地協力者に還元した。

【科研費公開研究会、子ども・当事者理解と教育的・援助的実践のカンファレンスの開催】

大学調査・地域調査は実地研究として意味のある活動であったが、同時に実施してきた科研費公開研究会(とその前進になった子ども・当事者理解と教育的・援助的実践のカンファレンス)は、訪問調査よりも頻回の開催が可能であり、これにより教育・保育に関する専門的知見を幅広く摂取することができた。

また、先述したように、大学調査で訪問先として検討していた北海道教育大学や都留文科大学の研究者や、地域調査の現地協力者として関係を深めていた方々を科研費公開研究会の講師として招聘することができ、訪問調査を補完する討議を実施することができた。

【理論研究】

理論研究では、大学調査、地域調査で得られた研究素材に、研究会などで練り上げられた知見を重ねながら、研究テーマを考察する

ための理論的課題が明らかになった。以下、一つひとつの課題及び成果を記しておく。

(1)教育の当事者である子どもと発達援助専門職(教師を含む)への聴きとり調査を継続的に実施し、彼らの語りを聴きとり記録し吟味することで、地域の教育課題が浮き彫りになるとともに、子どもや発達援助専門職にとっての「地域」の存在意義を再確認することができた。

今後は、教員養成・教師教育を担う高等教育機関そのものが、地域に根ざし、地域の発達援助機関の輪に加わり、そこで働く発達援助専門職と連携を取りながら、学生・院生の学習活動を紡ぎ出す教育スタイルを模索することも必要である。

(2)地域のなかで生きる子どもを支える教師には、学習活動の計画的組織者であるTeacher(教師)としての一面だけでなく、子どもを地域で生きる主体として認識しながら、彼らの生活史や生育史上の問題・課題を理解する必要があること、そのために教育・福祉・心理臨床・行政といった子どもを取り巻く専門家の協働を組織することが求められている。

よって、教師を現代の発達援助専門職の一員として位置づけることはもちろん、発達援助の環の中で独自の専門性を生み出していくことも必要となる。このことは引き続き、Educator(教育者)としての教師のあり方として検討を続けていきたい。

(3)教員養成・教師教育における「子ども理解のカリキュラム」の構想については、画一的な教授法を編み出し伝達するよりも、今日の子どもの取り巻く状況についての理解を深め、子どもをその生活から理解する視点を広げられるカリキュラムが必要になっていることが確認された。その一方で、例えばアクティヴ・ラーニングの形式的な採用が学習者にもたらす影響(主には受動的態度の悪化)などが懸念され、カリキュラムの構成原理を綿密に築き上げていく必要があることに気づかされた。

なお、研究開始当初に設定したカリキュラム案の構想(講義的学習、実習的学習、事例的な学習、教師の生活史・実践史に関する追体験的な学習、福祉・医療・心理臨床などの領域横断的な学習、子ども理解に関わる研究の動向と概念を把握する文献講読的学習、卒業論文・修士論文などの作品制作を通しての学習といった重層的なカリキュラムの構想及び構築)は、発案時の内容を基本構造と考えたうえで、それらを具体化し、実践レベルにまで引き上げねばならない。そのためには、今日の教師が置かれている状況をより一層把握するとともに、教師の多忙化が叫ばれる時代にあって、現場訪問型の学習活動を充実させたり、社会人院生(現職教師)の勤務先との連携を視野に入れたり、現場に直結するカリキュラムづくりを意識しなければならない。

(4)また、教師教育の現場では、現職教師たちがそれぞれのニーズに合った課題に取り組むことができ、その課題に向きあうための教師教育の専門家を育成・配置させる必要性も生じている。Teacher Educator 研究(あるいは教師教育者論)は、いまだ議論が重ねられていないが、今後の教師教育の質にもかかわることであるため、引き続き検討していきたい。

こうした理論研究の成果についても、各年度にまとめた『研究資料集』()等で報告した。これらの成果については、日本臨床教育学会や武庫川臨床教育学会等の課題研究などにおいて、学術研究を方向づける指標として活用される予定である。

以上の研究活動を通して、このたびの共同研究発足当初に掲げていた目標は、ほぼ予定通りに達成されたと言える。

5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計 18 件)

田中孝彦、東日本大震災と復興の思想 5 年間の現地訪問・聴きとり調査から、臨床教育学研究、査読有、第 4 巻、2016、6-23

渡邊由之、丹羽徳子の生活綴方教育実践の思想 とくに丹羽実践にあらわれる子どもの「生活史」に着目して、臨床教育学研究、査読有、第 4 巻、2016、109-122

田中孝彦、子ども理解のカリキュラムと教師教育者の問題、教師の専門性の再検討と教師教育における「子ども理解のカリキュラム」の構想 研究成果報告集 科研費(基盤B・24330229)、査読無、第 1 巻、2016、127-138

田中孝彦、「カンファレンス的学習」と Teacher Educator の課題、教師の専門性の再検討と教師教育における「子ども理解のカリキュラム」の構想 研究成果報告集 科研費(基盤B・24330229)、査読無、第 1 巻、2016、139-140

安東由則、北海道・上ノ国町を取り巻く社会的環境の変化と現状の把握 地域の教育と生活を把握するための基礎作業として、教師の専門性の再検討と教師教育における「子ども理解のカリキュラム」の構想 研究成果報告集 科研費(基盤B・24330229)、査読無、第 1 巻、2016、13-33

安東由則、武庫川女子大学大学院臨床教育学 学研究科の 20 年 社会人のための大学院大綱化政策の中で、教師の専門性の再検討と教師教育における「子ども理解のカリキュラム」の構想 研究成果報告集 科研費(基盤B・24330229)、査読無、第 1 巻、2016、87-114

上田孝俊、教育実践の基盤としての「子ども理解」、教師の専門性の再検討と教師教育における「子ども理解のカリキュラム」の構想 研究成果報告集 科研費(基盤B・24330229)、査読無、第 1 巻、2016、45-64

上田孝俊、現場の援助者たちと学び続けてきた大学院教育の一実践、教師の専門性の再検討と教師教育における「子ども理解のカリキュラム」の構想 研究成果報告集 科研費(基盤B・24330229)、査読無、第 1 巻、2016、117-126

筒井潤子、教師教育における実習体験「子ども理解の学生カンファレンス」、教師の専門性の再検討と教師教育における「子ども理解のカリキュラム」の構想 研究成果報告集 科研費(基盤B・24330229)、査読無、第 1 巻、2016、65-76

福井雅英、檜山人教師・小林勝行の教育実践とその歴史に関する覚書、教師の専門性の再検討と教師教育における「子ども理解のカリキュラム」の構想 研究成果報告集 科研費(基盤B・24330229)、査読無、第 1 巻、2016、35-42

渡邊由之、檜山・上ノ国という教育地盤に触れて 4 年間の訪問調査を振り返る、教師の専門性の再検討と教師教育における「子ども理解のカリキュラム」の構想 研究成果報告集 科研費(基盤B・24330229)、査読無、第 1 巻、2016、3-12

渡邊由之、教育職・援助職を目指す大学生の自己像と学習要求 学生の期末レポートを手がかりに、教師の専門性の再検討と教師教育における「子ども理解のカリキュラム」の構想 研究成果報告集 科研費(基盤B・24330229)、査読無、第 1 巻、2016、77-86

田中孝彦、子ども理解のカリキュラムと教師教育者の問題、日本教師教育学会年報、査読有、第 24 号、2015、62-71

山内清郎、今、「京都学派」研究から教育学は何を問うことができるか?、近代教育フォーラム、査読無、第 24 号、2015、170-176

上田孝俊、子ども・親と教師の関係性から生み出される教育実践の意味と課題、臨床教育学論集、査読有、第 7 巻、2015、22-29

福井雅英、中学校教育の希望を探る、教育、査読無、第 816 号、2014、5-16

筒井潤子、おとな・援助者が、子どもに学ぶということ、臨床教育学研究、査読有、

倉石哲也、保育士の支援に関する取り組み「保育士のための元気アップ講習会」の内容と評価、臨床教育学研究、査読無、第19号、2013、43-61

〔学会発表〕(計6件)

田中孝彦、教師志望者と現場教師が必要としている学習・研究について、地域民主教育全国交流研究会「学習」分科会、2015.11.23、ヴォーリズ学園(滋賀県近江八幡市)

田中孝彦、ある中学校教師の「いのちの教育」の模索の跡をたどる、日本教育学会第74回大会(ラウンドテーブル8)、2015.8.29、お茶の水女子大学(東京都文京区)

渡邊由之、子ども・若者の生活史に目を向ける 3.11後の聴きとり調査を中心に、教育科学研究会第54回全国大会(第16分科会)、2015.8.8、松本大学(長野県松本市)

上田孝俊、社会人大学院における援助職の「共育」の意味と課題、日本臨床教育学会第4回研究大会、2014.9.27、フォレスト仙台(宮城県仙台市)

田中孝彦、3.11後の世界に教育学は何を提起するのか?、日本教育学会第73回大会(公開シンポジウム)、2014.8.24、九州大学(福岡県北九州市)

渡邊由之、丹羽徳子の生活史・教育実践史とそこでの子ども観・教育観の形成について 教育実践に関する聴きとりから、日本教育学会第72回大会、2013.8.30、一橋大学(東京都国立市)

〔図書〕(計4件)

田中孝彦 他(編著)・渡邊由之(著)、かがわ出版、講座・教育実践と教育学の再生(別巻)戦後日本の教育と教育学、2014、319

田中孝彦 他(編著)・渡邊由之(著)、かがわ出版、講座・教育実践と教育学の再生(第1巻)子どもの生活世界と子ども理解、2013、303

深澤広明(編著)・影浦紀子(著)、協同出版、教育方法技術論、2013、234

小柳和喜雄 他(編著)・影浦紀子(著)、ミネルヴァ書房、新教師論、2013、219

(1)研究代表者

田中 孝彦(TANAKA TAKAHIKO)
武庫川女子大学・教育研究所・教授
研究者番号:80092261

(2)研究分担者

安東 由則(ANDO YOSHINORI)
武庫川女子大学・文学部・教授
研究者番号:10241217

上田 孝俊(UEDA KOSHUN)
武庫川女子大学・教育研究所・教授
研究者番号:30509865

倉石 哲也(KURAIISHI TETSUYA)
武庫川女子大学・文学部・教授
研究者番号:20234528

福井 雅英(FUKUI MASAHIDE)
滋賀県立大学・全学共通教育推進機構・教授
研究者番号:20388804

筒井 潤子(TSUTSUI JYUNKO)
都留文科大学・文学部・教授
研究者番号:70405075

山内 清郎(YAMAUCHI SEIRO)
立命館大学・文学部・准教授
研究者番号:80351253

影浦 紀子(KAGEURA NORIKO)
園田学園女子大学・人間教育学部・講師
研究者番号:00390287

渡邊 由之(WATANABE YOSHIYUKI)
武庫川女子大学・教育研究所・助手
研究者番号:40611348

(3)連携研究者

間宮 正幸(MAMIYA MASAYUKI)
北海道大学・教育学研究科・教授
研究者番号:70312329

早川 りか(HAYAKAWA RIKA)
藍野大学・医療保健学部・講師
研究者番号:50737575

西堀 涼子(NISHIBORI RYOKO)
山梨県中央児童相談所・相談支援課